破壊的日常

冴河冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破壊的日常

【Ｎコード】
Ｎ５４８５Ｅ

【作者名】
冴河冴

【あらすじ】
――人は、ここまで堕ちる――＊全４話完結（予定）毎週日曜日更新

始まった朝に（前書き）

この小説は、暴力的描写があります。苦手な方は、お読みにならないことをおすすめします。

始まった朝に

朝の教室。

「あいつら、そろそろ色んな渾名で呼ぶの飽きないのか……？」
俺は憂鬱な気分で教室のドアを開ける。

祐樹が話しかけてきた。
「お嬢、おはようございます」
「……」
恭平が喚いている。
「暴力変態！」
「…うるさい」
由美がこっちを向いて言う。
「おはよう、怪獣」
「うるさい！」
友がにやけながら言う。
「よお、大麻」
「うるせえっつってんだろがっ！っていうか新しい渾名つくんな！」
「ん、潤、いたんだ」
「お前……」
俺は美咲をちょっと見てから、やっぱりやめたと目を逸らした。
防具袋を担ぎ直して盛大に溜め息をついた。重いったらありゃしない。学校に来ただけで疲れた理由はそれだけじゃないんだけど。
寺本潤。頭脳迷走。中二剣道部。部内１弱い。渾名多数。後ろ向きでポジティブで、思いつめてる感じで悩みがなさそうで、どＳでどＭ。素行が悪く、優等生で、生意気で卑屈。バカ正直で二枚舌。
まあ、要するに捉えどころのない奴。多重人格もどきとも言える。
言われたこともある。なんかちょっと本質違う気もするけど

俺の渾名はいろいろあって、そしてそれぞれ理由がある。
お嬢はとある教師と先輩が言っていたのを余計な奴が聞きつけて言い出したもの。
暴力変態は、飛び蹴りした俺を見た剣道部員が、暴力反対を言い間違えてそのままになったもの。
怪獣（そのネーミングセンスってどうよ？）・大麻は共に不明。
他にもガラの悪い不思議ちゃんとか、素行の悪い優等生とか、炭素（！？）とか。その由来はほとんど俺の暴力的かつ破天荒な性格だ。

俺が強くなりたいと望んだのはいじめられていたからだけど、それが叶った今、残ったものは何もない。いじめられないかわりに信頼と安心感を失ったのだ。

両方を選ぶことだって、できたのに。
両方できている人だっているのに。

だから今日こそ、誰も殴らず過ごそう。そんなことを誓って俺の一日は始まる。

「おはよう」
「おはよう」
友の声に、俺は思考を戻した。
「その髪どうしたのさ？」
「髪型のこと？」
「なんかその…すごいワックス使ったの？」
「いや、寝癖が直んなかっただけ」
「……」
「…笑っていいよ……」

そう。俺の日々は平和だ。みんな良い奴だ。
ただひとつ、家庭環境を除いて。

＊

俺が通う中学の隣には高校がある。小学校の敷地は少し離れたところにある。ちなみに高校は明日から家庭学習日で、中1はレクリエーションキャンプだ。

田舎で生徒数が少なく1学年1クラスで6、7人。さして偏差値が高いわけではないし、部活動も特に力を入れているものはない。部活は剣道部と鬼ごっこ部（！？）だけで、それも廃部寸前のため小中高合同（！）だ。野球部はあったが廃部になったらしい。ていうか何故剣道なんだろう。ドッチボール部とかの方がいいのでは？で、さして大きな事件を起こすでもない。そんな学校。

まあ俺が六年の時切れて教科書をその辺に捨てて、窓から机を放り投げた話は有名だけど。

要するになにが言いたいのかというと俺の家は金は困らない程度にはあって、両親共に健在（？）で、特に不自由せず生きてきて、ド田舎の小さな学校に通っていて、俺は暴力的だけど親はそれを知らないという日本では普通の家庭に生まれ育ったってこと。田舎のネットワークはすごいけど、俺の親は人望がないので、暴力沙汰が知れることはまずない。

だからまあ、きっと恵まれているのだろう。感謝できていない、あまり幸せに思えていないのが現状なのだけれど。

甘ったれている。わかってるさ。だけど……感謝できたほうがよほど楽だし正しいのだろうけど、俺にはなかなかそうは思えないのだった。

虐待されていたほうが、法的手段に訴えられるからましではないかなどという不謹慎なことを考えたりしたこともある。

俺は家庭環境を変えるために全力を尽くした。
話し合おうと試みたり、家出して訴えたり（その時は本当に大勢の人に迷惑をかけてしまったけど）、思いつくことは全てやった。

その全てが無意味だったわけだけど
もう泣くのはやめた。何をしても変わらないのだから。
もう努力するのはやめた。諦めるしかないから。
もう話す必要もないと思う。なにを言っても聞かないのだから。
聞こえていても、伝わらないのだから。
そして俺は、分かり合うことを諦めた。傷つくだけだから。愛される事はないし、変われないって事をはっきりさせても苦しいだけだから。
あんたたちなんか必要ないって、死んでも構わないって、断言できるようになってしまった――なった自分がここにいるから。死んでもきっと泣けないと思うから。
罰当たり、親不孝、なに言われても仕方ないけど。

一時間目が英語という嫌がらせみたいな時間割だったので、授業中は夕飯は何を作るかを考えていた。
周りでのんきに授業してるみんなはこんなことしなくていいなんて不公平だよなあなんて思って、あわててそれを打ち消した。

ひどく憂鬱だった。

自己嫌悪

今日は部活がある。
俺は寝不足でふらつきながら席に着いた。意地でも授業と部活は出ないと、関係無い人に八つ当たってしまったりする元なので、死にそうでもない限り頑張るのだ。
いらいらするなあ、この野郎。
次は6時間目、白ける数学だ。
数学は復習ばっかなので睡眠時間にあてることにした。自分がちゃんと受けている授業時間を数えようとして、怖くなってやめた。
そういやよく寝てる先輩いたな。確か去年の高3？

先輩はもう卒業したということに、いまだに実感が湧かない。高校に行ったら先輩たちがいるような気がして、でもいるのは去年の高2の先輩たちで。その度にもういないってことを思い知って。その度に助けてもらったことを思い出して。
俺の中で先輩たちの存在が大きすぎたんだと思う。

先輩たち、今何してるんだろう。

人を思いやっていたから、こんな人になりたいって思った。自然に尊敬できたから、言われなくても敬語が出てきた。先輩を尊敬しろなんて一度も言わなかったし、そんな言葉は必要なかった。
俺もあんな風になれるだろうか。だけど……なれるわけはないよな。なれるはずがないよな。

高3というと、まだ俺の中で保留している問題が一つあるのだけれど。
保留と言うよりは接触を図ることも拒まれるほど嫌われたかもし

れないのを、確かめるのが怖くて逃げてるだけなのだけど。
それは人によってはくだらないと一笑に付されて気にも留めないような、そんなことだったけど、でも自分で掘った溝――やったこと――で、それは消えてくれはしなくて。あの人の性格じゃ、絶対に本気で受け取ってしまっていたのは確かで、そこまで頭が回らなくて。もう馬鹿とか死んだほうがいいんじゃないのかとしか言いようが無い話で。

こんな感傷に浸るなんて、らしくもないって言われそうだけど。こんな後悔をするなんて、会った時には思いもしなかったのに。
こんな世界が待ってるなんて、生まれる前に知ってたら生まれようとなんかしなかったのに。

俺らしいとからしくないとか、よく言うけれどはっきり言ってそれがなんなのか全然わからない。
ていうか俺自身自分の人格なんてものはあんまり知りたくない。調べなくても破綻してるか存在しないかの結果が出るのが目に見えてるから。俺は自称普通だったけど、やっぱりちゃんとした普通になりきれてない部分があるし、それどころか異質なものと認識されている節があるのは否めない。実際そうだし。

数学の授業が始まったので、机にひじをついて眠った。
だけどひどく虚しくて、寝れるような心境ではなかった。

＊

俺は6時間目が大嫌いだ。終わったら家に帰らなきゃならないから。

小学生の時は学校が嫌いだったし、家も嫌だったから毎日死んで

るような気分だった。まあ今は学校好きなんだけど。ていうか俺にそんな感情を抱く権利はないのだけど。命とかくだらないって思ってた。ていうかどうでもよかった。毎日死ぬことだけを考えていた。荒んでたんだなあと思う。

果たして今とどれほどの差があるのかは知らない。敢えて確かめたくはない。

そもそも俺みたいな人間が、今の状況を感謝できないなんて相当の我が儘なんだけど。

殺されることもなく生きてて、それがもう奇跡みたいなものなのに。

幼稚園児だった自分と小学生だった自分、中学生になった自分。成長できたかはよくわからない。どれがましだったのかもよくわからない。どの自分のことも、きちんと把握できていないから。

どの自分に戻りたいかと問われたら、俺はきっと戻りたくないと答えるだろうけど。もしかしたら自分はよくなるどころか悪化しているかもしれなくて、それをはっきり知るのが怖いから逃げてるんだと思う。

ていうか逃げてばっかでかっこ悪いな——俺はいつだってそうなんだけど。

家になんか帰りたくない。

俺がどんなにそう思っても養ってもらってる事実も、夜になれば帰らなきゃいけない現状も変わりはしない。感謝できない自分が悪いんだよ。わかってる。わかってるはずなんだけど。

部活に行くために防具袋と竹刀を担いで階段を駆け下り、最後の9段を飛び降りた。いらいらする。何でどうしようもないことが世界にはあるんだろう。そしてどうにかできるものも、何故俺は放棄してしまうんだろう。

俺はちゃんと生きる気あるのだろうか。微妙なところだ。
俺はちゃんとした人間になる気があるのだろうか。多分ないんだろうな。死にたいのか生きたいのかよくわからない。
死ぬのは痛そうだし、生きるのは辛い。それが俺に与えられた罰なのだろうか。
俺の犯した罪は一体、どれほどのものなのか。考えることや知るのを怖がってたら償いようが無いのはわかってるけど。さっきからだけどばっかりだな。言い訳しかできないのか、俺。

部活があったけれど、もうそんな気力は残っていなかった。
俺は階段の一番下の段に寄りかかってため息をついた。

「もういいや……だりぃ……」

原因不明

朝。登校して教室のドアを開ける。

何かが違う。

投げかけられる言葉に答えながら、俺はため息をつく。なんだよ、この気分の悪さは。なんだ、この気持ちの悪さは。なんだよこの噛み合わなさは。

どうしてみんなの眼をまっすぐに見られないんだよ。何の不満があるって言うんだよ。昨日と同じような一日だ。そのはずなのにどうしてこんな違和感が……。

どうしてだ。表情筋は昨日と同じように収縮し、笑顔をかたちづくる。なのに心は、言い知れぬ虚しさを抱いたまま。確かな、そして見当違いな憎しみを抱いたまま。

気持ち悪い。俺は本当に俺なのか？

自分の手のひらを痕がつくほど握り締める。だけどダイレクトにその痛みが伝わってこない。どこか他人事のような、薄っぺらい感覚。

確かめるのが怖くて、俺はそれを制する。

これは、これが確かに俺であるなんて、気持ち悪い。嫌だ。知りたくない。

みなを羨ましく思う感情が、日常に歪みをもたらし始めた。

＊

憂鬱だ。全然楽しくない。

人に会うたびに自分の人格に嫌気がさす。友達と話してても先輩と会っても、後輩とじゃれてみても。いつもと変わらないはずなのに、何やっても面白くない。

剣道ですらやる気が出なくて、サボったら後から後悔の念に襲われて。

笑ってみても一時的にしか笑顔でいられない。どうでもいいはずの事でいらいらしてしょうがない。流せるはずの悪口に、いちいち取り合っている自分がいる。

急に吐き気や頭痛に襲われる。授業なんか受ける気になれない。苛立ちが抑えきらなくなり、不意に壁なんかを蹴り飛ばしてみる。壁にあいた穴が、己の空虚さの証のようで、誤魔化すように何度も蹴り続けた。

気が付くと屋上のフェンスや四階の窓に目が行ってしまう。死にたいのかもしれない。否、死にたいのだろう。全然楽しくないし、俺自身が厄災のもとだ。

寧ろ――死んだほうがいいんじゃないかな。そしたらみんな利害が一致して幸せだ。みんなが幸せなのはいいことだろう。

だけど飛び降りたら死ねる高さに位置する窓には鍵がかけられていて、ロックを外しただけではあけられなくなっていた。面倒くさいことすんなよ。

剣道だって下手くそ。勉強ももう半年くらい良い成績はとっていない。頑張って授業を聞いても良くならない。才能ないし、努力する気も失せてしまった。

どうしようもないなあ、俺。なんでこんなになっちゃったんだろう。いつからこんなんだったんだろう。

死んじゃいけないって、学校楽しいって思えるようになったはずなのに。そう決めたはずなのに。友達は大事だって、ちゃんとわかったはずだったのに。なんでだろ。どうしたらこんな思いしなくて済むのかな。

なんでかがわからないからどうしようもない。

『潤、救いようないね』

昔言われた言葉が蘇った。その通りだった。もうどうしようもない。変わりようがない。気持ち悪い。俺じゃないみたい。

だけどもう、こうなる前の俺を忘れたよ。

漠然とした気持ち悪さを、身体が憶えているだけ。普通ってなんだろう。みんなはどうしてあんなにちゃんとしていられるんだろう。なんで俺だけ変われないままなのかな。死ぬしかないみたいじゃん。なんで生まれてきたのかわかんないじゃん。間違えたのかな。本当は生まれてきちゃいけなかったんじゃないのかな。じゃなきゃほら、辻褄が合わないんだよ。

誰の声も聞こえない。
何の音も聞こえない。
どの言葉も響かない。
誰の思いも伝わらない。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるいきもちわるい死にたい死にたいしにたいしにたいしにたいしにたいしにたいしにたいもう生きていたくない生きてるのが辛い逃げだってなんだってそれでいい。

俺何言ってるんだろう。何考えてるんだろう。意味わかんない。

支離滅裂じゃん。ああ、もともとだっけ？
狂っちゃったのかな？狂っちゃったほうが楽だ。もう何もわからなくなればいいんだ。酒でも煙草でもヤクでもなんでもいい。何も分からなくなるならそれでいい。全部忘れたい。みんなを忘れたい。
自分の身体にいるのが嫌だよ。汚れすぎて見ていられない。逃げたい、全部降りたい。生まれてなかったことにしたい。最悪なのぐらいわかってるよ。だけどもう死にそうなんだから死んだって変わんねえよ。

償うとか逃げだとか、全部死にたくないから作った言い訳だ。自分の言い訳を信じ始めた俺はお終いだね。嘘つきの最終形だよ。
ちゃっちゃと死ねないかなあ。贅沢言えばプラス思考になれないかなあ。なんでこんなに辛いんだろう。なのになんで死ねないんだろう。

決まってる。
これが俺のしたことだからだよ。

その時寺本潤の目には何も映っちゃいなかったし、そこには狂気が宿っているだけだった。
クラスメートは誰もそれに気付いてはいなかったけど、気付いていたところで何かできたのかというとそれはきっと何もできなかっただろう。

チャイムが鳴って朝のホームルームは終わった――――――そして、それは始まった。……否、やはり終わったと言うべきかもしれない。
というか、ひょっとしたらひょっとすると、寺本潤が生まれてしまった十三年ほど前に、それは既に終わっていたのかもしれない。

終わったときに（前書き）

最終話です。
グロい描写が含まれています。苦手な方はもっと別のためになる作品の方に移動していただくことをおすすめ致します。

終わったときに

みんなずるいんだよ。そんな悩みなさそうな顔しちゃってさ。恵まれてることに感謝しろとかうるさいんだよ。死んじゃいけないなんて、そんな状況になったこともないくせに簡単に言うなよ。毎日夫婦喧嘩してて、兄貴の成績ばっか良くていつも比べられて、自分の人格は破綻してて、才能なんかかけらもなくて、勉強も全然できなくて、変な渾名つけられて。『悩みなさそうに見える』って楽しそうに見えるのかよ？楽しいわけねえだろ！

お前らに死にたい奴の気持ちなんかわかんねえだろ。お前ら生きてることが苦痛でしかなかったことねえだろ。そんな奴らのこと、わかろうとしたことなんかねえだろ。

わかってる。八つ当たりだ。

だけどそんなことはもうどうだっていい。

人のこと大麻とか言いたい放題言いやがって……だったらマジでそうなってやる。それで全員ぶっ殺してやるよ。

由美が話しかけてきた。

「怪獣、明日の授業、なん…」「うっせえ黙れ！しつけえつってんだろ！」

「お前、何そんなにマジになって…」「死ね。お前ら全員死ね！」

鳩尾に蹴り、脳天に全力籠めた踵落としを入れる。だいぶやってなかったけど急所には入った。

そのまま腹を蹴り、机を由美の頭に振り下ろす。

「寺本！一体何を」その担任の声に、血と脳漿（のうしょう）がぶちまける音がかぶった。

悲鳴が上がる。
「あんた助けないのかよ」
「……」
「自分の命が惜しくて動けねえんだよな！生徒なんか本当はどうだっていいんだろ」
「違う、俺はそんなんじゃ…」「嘘つくんじゃねえよ！」
俺は机で所構わず担任の全身を打った。骨の砕ける音が、肉の抉れる音がする。手から机がすべり落ちそうになるほどの体液が手を染める。
生徒は怖気づいて、動けない者ばかりだ。

担任が倒れた。それを見て辛うじて口が開いた美咲が叫ぶ。
「嘘、こんなの…潤、どうしちゃったのこんな、こんな…」「うっせえよ！いい子じゃなくて悪かったな」
俺はその目を狙って机の脚を突き刺す。ぐちゃりという音を、悲鳴が掻き消す。それを見て失禁する奴がいた。
そのまま反動で引き抜くと、つぶれた目玉が辛うじて視神経でぶら下がった虚ろな眼窩があらわになり、脚が血を止めていたのだろう。刹那、血が噴き出た。脳まで到達したようで、動かなくなった。

祐樹がカッターを向けてきた。
その手は震えている。
「てら、もと！…やめろ、でないと…」「あぁ？何が言いてえんだよ？」
俺はカッターを持って向かってくるその勢いを利用して、手を捩り上げカッターを奪いった。そのまま腹部に刺す。脳天を全力で殴り、失神させる。
「お前ら死ね！自分だけは正しいみたいに思い込んでそのまま死にやがれ！」
そう言って残った恭平と友を、床に落ちていた今は無き野球部の、

金属バットで殴った。

みんなおかしい。みんな間違ってる。みんなは自分だけは正しいって思ってる。

『ｎｏｔ（ノット）　ｍｅ（ミー）　ｓｙｎｄｒｏｍｅ（シンドローム）』

みんな狂ってる。ただ俺が群を抜いてただけで。

「あああああああああああぁぁーーーーーーーーっ！」

呻き声と血煙が部屋にたちこめる。

体液でバットの色が変わっていく。

中１はキャンプ、中３は屋外授業でいなかった。先生はその付き添い。

全員死んだ。

この学校には今、俺しかいない。

床に溢れた体液は少しずつ水嵩を増し、死体たちはもう動かなかった。もっとも祐樹はまだ辛うじて生きてるだろうが、すぐ死ぬだろう。

バットを投げ捨て、そのまま屋上に向かった。

フェンスをのぼって反対側に降りた。血だらけの手が目に入った。

殺したんだ。

俺は、人を殺したんだ。あんま実感湧かないんだけど。

俺は……何を考えているんだろう。
後悔してるような気がするけど、何も感じてない気もする。そんな自分を恐れているような気がするけど、悲しいような気もする。
手を翳すと、赤黒い体液が地面に落ちていった。

血とかもう全然平気だ。今すごく冷静だよ。
麻痺したのかな？麻痺しちゃったんだろうな。

あー。駄目だ。俺終わってる。ていうかさっき終わった。

なんで俺はあいつらを殺したんだろう。うざかった、憎かったから。生きているのが楽しくなかったから。自分よりも楽しそうだったから。みんなすごくいい奴だったから。
なんで俺はあいつらとまともに話さなかったんだろう。
裏切られるのが怖かったから。話しても楽しくなかったから。あいつらの愚痴に付き合ってらんなかったから。自分の底の浅さを思い知らされるのが怖かったから。

逃げたのかな。
全員殺して比較対象消して、自分のことから逃げたのかな。自分のこと知るのをやめたのかな。変わろうとすることを諦めたのかな。
それはやっぱり逃げだよな。人格崩壊したんだな。
投げ出した足が、支えもなくぶらぶら揺れる。

でももう逃げでもなんでもいいや。
自分が最低だってことはわかったから。わかってたけど、思い知って生きていられなくなったから。
親殺すの忘れたけど、まあいい。

俺は兄貴やみんなと自分を較べて、全て諦めて潰れた。それが俺の過ち。それが俺の、弱さ。

俺は携帯で１１０番をした。係員に喋る隙を与えず、さっさと用件を言う。

「寺本潤。中学校で同級生全員と担任を殺しました」

何をしても償いにはならない。

俺は、堕ちた。

俺は既に、堕ちていた。

終わったときに（後書き）

うわあ…何書いてんだろう……。

人が変わっていってしまう様を書きたかったんですが…はい、これはただ狂っちゃってるだけになってます。文章力なくてごめんなさい。

これはグロに重点を置いたものではないので、物足りない方がいたかもしれません。もっとグロくしろとかお思いになったかもしれませんがご容赦ください。

それからグロくて気持ち悪くなってしまった方…すみません。

ここまで読んでくれてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5485e/

破壊的日常

2010年10月9日01時54分発行